

文学館の怪

今日あした

幹線道路の銀杏並木の歩道を歩いていたら、野球帽を目深にかぶり、黒い大きなマスクをした、背のすらりと高い女とすれ違った。

すれ違いざまに、大股で颯爽と歩くその人に思わず顔を向けた。女も同時にこちらを向いたので目が合ってしまった。

コロナ禍の今では、一昔前では考えられないような黒いマスクも、何の違和感もない。帽子とマスクの間から見えた目は、大きく力強く魅惑的に輝いていた。

七十を過ぎた私も白ではあるが、マスクをしている。目が合った瞬間、二十代であろうその女が微笑んだ、ような気がした。

その日私は、仲間同士の読書会に参加するために会場に向かっていたのだが、強烈な吸引力に惹かれるように回れ右をして彼女の後を追っていた。

どうかしている。私は決して見も知らぬ女の尻を追いかけるような、いい加減な男ではない。

女の背中を見ていると、どうも私を意識しているようで、十メートルくらい先を歩いていたのだがゆっくりこちらに振り返った。目が笑っている。まるで合図でもするように、塀が途切れたところから左に入って行った。そこまで行って中を覗くと鬱蒼とした木立の間に細い道がついている。入り口にはよく見なければわからないような、白い細長い短冊を模した看板に

【文学館へようこそ】と書いてある。

私は、月に一度読書会に通っているのだが、反対方向に歩いたのは初めてで、こんな所に文学館があったことは全く知らなかった。読書仲間からも聞いたことがない。ちよつと入ってみて、良さそうだったら仲間にも教えてやろう、そう思って細い道を奥に進んだ。かなり広い敷地で木立を抜けると広々とした芝生の庭が広がっている。女の姿はどこにもない。

道の先に洋館が見えた。黒塗りの車が横付けできそうな長い廂のある入り口が緩やかな両側のスロープの先に見えた。

女はあの建物に入って行ったのだろうか、文学館ならだれが入っても構わないだろう。だが、受付がない、中にあるのだろうか。私は目の前の頑丈そうな観音開きの木のドアを手前に引いた。ドアは思ったより抵抗もなくすっと開いた。御影石の広いたたきはきれいに磨かれていて中は静まり返っている。受付のようなものは無く、壁に沿ってねこ足の文机が置いてあり、パンフレットのような冊子が積み重ねてある。手に取ると、淡い紫色のぼかしの中に

「みずから命を絶った作家たち展」と表題が書かれ、左下には黒色のバラの花が一輪描かれていた。

表紙をめくると目次のように、芥川龍之介、金子みすゞ、太宰治、三島由紀夫、川端康成、等々の名前が一章ずつ連なっている。

思わず薄暗い玄関を見回した。たたきに続く上がり框の辺りには何も置かれていない。先ほどの女はここには来なかったのだろうか、そう思った矢先、ドアが開き女が上半身を覗かせて、

「あら、オジサンも文学館に来たの」と、はすっぱな調子で私を見た。

「ああ、初めて来たんで様子がわからなくてね。君は来たことがあるの」

「うううん、初っじめて！ 外から見たけど誰くれも、人、いないよ。でも開いてるから見て見ようよ、ね、オジサン」

「そうだね。靴を脱いで入るのかな」

私は、なんだか気味が悪いので帰ろうかと迷っていたのだが、この賑やかな娘さんと一緒に入ってみるか、と言う気になった。

「靴のままでもいいじゃん。スリッパだって置いてないし」

そう言って玄関のたたきの中ほどに立ち止まり、野球帽を取って頭を左右にゆすった。すると腰までも届きそうな長い髪が下りて来た。

黒い大きなマスクはしたままだった。よく見ると胸の大きく開いたTシャツに、体にピッタリはりつくような長いスカートと、底の厚いサンダルを履いている。この格好の所為で背が高く見えたのかもしれない。女は、冊子を手にとると中をパラパラとめくって最後のページを見て

「ほら、案内図が書いてあるじゃん。庭に沿って廊下があって、その前が展示室みたいだよ」

そう言うのと靴のまま赤い絨毯が敷かれた廊下を歩きだした。右に曲

がり突き当りを左に行くと、急に明るくなって庭全体が見えて来た。

なるほど、芝生の庭に面した最初の部屋には、作家・芥川龍之介と書かれた表札のような物がかかっている。十畳ほどの広さの部屋には花柄の絨毯が敷かれ、ぐるりと三方には龍之介の本が並んでいる。真ん中に置かれた机には、彼が愛用したペンや原稿用紙が飾ってあった。隣の部屋は、金子みすゞ。略歴があつて最後は二十六歳、睡眠薬服用により永眠とあつた。

友人の家の便所に飾つてあるカレンダーに、彼女の詩が載つていたのを思い出して、複雑な思いに駆られた。

次の部屋は太宰治。三十八歳で、入水心中とある。あまりにも有名な話だ。

どこからか人の話し声が聞こえてきた。複数の声の中に、女の声が混じつてる。先ほどの女だ。そういえば、私が龍之介の部屋に入つて話しかけようとした時にはいなかった。先を急いでいたのだろうか。

「ユキオは私をモデルに、悲恋の物語を書いてくれるって言ったのに……」

「ナオミさんがわき目もふらずこの三島由紀夫の部屋にお越しになつたのはやはり、その、なにですか」

「いいえ、私は谷崎に書いてもらっちゃったから、もういいのよ。ユキオも読んでしょ、ほら、痴人のアイ」

女はナオミという名前だったのか、ここに来るのは初めてだと言つていたけど……。それにしても誰と話しているのだろう。

私は庭に面した廊下を先に進んだ。三島由紀夫の部屋の前に立つと、なにやら話声が聞こえる。ここに違いないと思つて目を凝らしても人影はない。

「では、ナオミさんは僕に会いたくてお越しになつた？」

別の男の声があった。

「バカ言つてんじゃないよ、治は心中したんだろう、そんな奴は問題外だね」

「辛辣ですね。モテる男は辛いのですよ」

私は「三島由紀夫」と表札のかかった部屋に入って行った。と言っても展示室になっっているので廊下側は開けっ放しで、やはり部屋の真ん中に大きな机が置いてあり、思い出の品が飾ってあった。机のわきには脚付のハンガーに軍服が展示されている。

ああ、これが割腹自殺をしたときに着ていたものだろうか。あの日、ちようど昼飯時だったので食堂のテレビにくぎ付けになったことを思い出した。

「ぼくはね、三島君が高校生の秋に、原稿を持ってきたときのことを今でも思い出すよ。これでは駄目だと返すと、やり直してくる。何度も何度も。断ったら死んでしまいそうな顔をしていた。早成の才華が眩しくも痛ましくも感じたものだった」

「川端先生はその頃から老人だったりして……」

「ハッハ、ナオミさん、僕は青年でしたよ。髪もふさふさしておりましたな」

「だって、川端先生は死んだときもふさふさだったじゃん。白かったけど……」

蓮っ葉な物言いをしているナオミは一体、誰と話しているのだろうか。話し声は部屋の奥の本棚に隠れている襖の隣の部屋から聞こえるようだ。本棚の横に襖一枚分開閉が出来るようになっていた。

私の好奇心はもうこらえきれず、襖をノックした。襖が少し揺れただけで、音はあまりしていない。だが、今まであった人の気配がピタリとやんで、無音の張りつめた空気が私の身を包んだ。私は金縛りにあったように動けない。まわりに動く者は何もない。

何分くらいたっただろうか、襖が突然開いた。女が中から開けたのだ。中は暗くてどんよりとしてよく見えない。

女は私の手を取って中に招き入れてくれた。

「君の話声が聞こえたので、文学館の方と話されているのかと、ノックしたのですが……」

「ああ、ここにいるのは、今、展示している自殺した作家たちだよ」
「ここにいるって、誰もいないじゃないですか、気味の悪い冗談はや

めてくださいよ」

「オジサン、見えるじゃん。ほら、あそこにいるのが三島由紀夫、その隣の爺さんが川端康成、向こうの長椅子に掛けているのが太宰治。その向こうの影の薄いのが、詩人の金子みすゞ」

「オイオイ、ナオミさん、大文豪を呼び捨てかい！ そちらの方は生身のようにだけど、われわれが見えるのかしら」

軍服姿の三島由紀夫が私を指さしながら言った。

「はい、うつすらとではございますが見えております。あの、先生方の御本は常々愛読させて頂いております。お目に書かれて光栄でございます」

「オジサン、まあ掛けなヨ」

言われるままに入り口近くの椅子に腰を落とした。

「お嬢さんはナオミさんと言われるのですか、どうして皆さまとお知り合いになられたのですか」

「ワインでも飲みながらゆっくり話してやるよ、ね、みんな」

私はその言葉につられて、広い洋室のゴブラン織りのソファや肘掛椅子にゆったりと掛けている方々に目を向けた。皆さん、ワイングラスを手に、それぞれが明後日の方を向いて、いや々な顔をなさっている。

私は招かれざる客なのだろう、突然押し掛けたのだ、迷惑に決まっている。

すると長椅子に掛けている太宰治が、ワイングラスを少し持ち上げて「ワインは百毒の長、ですかな」と言うと、

三島由紀夫がやおら立ち上がって、直立不動で

「毒リンゴではない、毒ブドウで新世界見学をお望みなら、きちんと展望を持って誠心誠意お飲みなさい」

「もののあわれを噛みしめながら最後の盃もまた一興」
そういつて川端康成は筋の浮いた右手を目の高さまで持ち上げた。

金子みすゞは、伏し目がちに立ち上がると、若い美しい声で、
「死んだ人も生きてる人も、みんな違ってみんないい だから葡萄酒飲まぬがいい」

私は、ナオミに差し出されたワイングラスを手に取って思わず中の赤い液体をじっと見て、返すつもりでナオミの方に差し出した。

だがナオミはそれを受け取らず、乾杯するかのように自分のワイングラスを持ち上げた。そして首をぐるりと回しながら、黒いマスクを横に剥ぐように外した。

「グワーツ！」

私は年甲斐もなく大声を上げて、その場に頽くずれた。

ナオミの真っ赤な口は耳まで裂けていたのだ。

「山田さん、どうされたのですか」

はっと気が付くと、そこは毎月通っている読書会々場の円卓会議室だった。

完